

第 2 9 期第 4 回

札幌市スポーツ推進審議会

会 議 録

日 時：2024年3月6日（水）午後2時開会
場 所：ORE札幌ビル 9階 会議室3

1. 開 会

2. 報告事項

○黒田会長 皆様、よろしくお願いいたします。

議題に入らせていただく前に、皆様のお手元にマイクがありますので、マイクを使用して発言をしていただければと思います。当審議会は、後日公開による議事録作成のため、録音を行っておりますので、ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

最初に、報告事項のオリンピック・パラリンピック招致活動の総括・検証について、事務局より説明をお願いいたします。

○事務局（深井企画事業課長） お手元に配付している資料1から3、招致活動停止までの経緯、招致活動の総括・検証、招致活動を踏まえた今後の取組により、招致推進部の調整課長の工藤よりご説明を申し上げます。

○事務局（工藤調整課長） 調整課長の工藤でございます。

資料のご説明をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

初めに、資料1の招致活動停止までの経緯についてです。

1のIOC理事会における決定事項についてですが、昨年11月29日のIOC理事会におきまして、2030年大会と34年大会の2大会について、次のステージに進む地域、都市が決定され、2038年大会に関してもスイスが優先対話というステージに進むこととなりました。

この決定を受けまして、2の招致関係者意見交換会を昨年12月19日に開催し、出席者から、大会招致に向けて動くための足がかりを失った状態であり、一度立ち止まざるを得ないなどという考え方が示され、招致活動を停止することといたしました。

また、出席者から寄せられた意見を踏まえ、今後は、将来の招致に向けた長期的な観点から、ウィンタースポーツの一層の振興や競技大会誘致を積極的に進めるほか、大会による加速化を期待していたユニバーサルなどの重要概念を踏まえたまちづくりを一層推進することとしたところです。

続いて、資料2に移らせていただきます。

招致活動の総括・検証についてでございます。

資料2-1をご覧ください。

こちらの資料は、年表形式で招致に関する支持率の推移と主な動きや社会情勢などを掲載しております。

支持率が低下傾向にある時期を大きく三つに分けております。

第1期は2018年秋頃までの時期であり、東京2020大会における国立競技場計画見直しや、いわゆるV1予算公表などにより、大会開催経費に対する不信感が高まった時期でした。その後、胆振東部地震の発生により2026年大会の招致活動を終了した後は、2020年の55%をピークに再び第2期として2020年前半まで下降傾向が続きました。

た。

この時期は、コロナ禍での行動制限や東京大会の延期、無観客開催、２０２２年１月の記録的な大雪の影響を受けた期間と言えます。

そして、第３期は２０２２年夏以降の時期であり、東京大会の事案により、オリンピックへの不信感が増大した期間となります。

続いて、資料２－２、課題の検証についてをご覧ください。

招致活動について、なぜ大会招致への理解が広がらなかったのかということを中心に、今年の１月上旬から中旬にかけて、外部有識者や関係団体からヒアリングを行いました。

そのヒアリング結果を踏まえまして、大会招致への理解が広まらなかった要因を表にあります各取組におきまして、外的要因、内的要因の両観点から分析しております。

おめくりいただきまして、資料２－３に招致への理解が広まらなかった要因のまとめを記載しております。

外的要因としましては、過去大会における予算増や新型コロナ拡大による機運醸成活動の制限、東京大会事案の影響によるオリンピックに対する不信感、内的要因としましては、若い世代の巻き込みや発信不足、大会開催の意義や効果、大会経費の仕組みが分かりにくかったこと、関係団体との連携に課題があり、市主導の取組では限界があったことが挙げられます。

この総括結果を踏まえまして、さらに１０年にわたるオリンピック・パラリンピック招致活動を振り返りますと、オリンピックへの不信感を払拭し、誰もが大会開催意義をイメージできるような端的で明確なメッセージが必要であったことに加え、行政主導での招致活動ではなく、市民、企業などの民間が主導となり、関係団体を巻き込んだオールジャパン体制の構築が必要だったのではないかと今回の検証結果としてまとめさせていただきました。

そのほか、資料下段に、各年度における招致に関わる人員の推移と招致経費を載せております。

続いて、資料３、招致活動を踏まえた今後の取組をご覧ください。

大会招致活動がもたらしたものとしまして、まず第１に、国際スポーツ大会の開催になります。冬季アジア大会やラグビーワールドカップ、東京２０２０大会のマラソン、競歩、サッカー競技など大規模国際大会が札幌で開催され、大会運営能力が大きく向上したほか、パラノルディックスキーワールドカップなど、パラスポーツ大会の開催も実現しました。

第２に、市民、企業などとの連携になります。

将来の札幌について、若者や子どもたちを含む、市民の皆様に意見を述べてもらう取組を実施できたほか、企業などと連携した取組やオリパラ教育を通じ、スポーツの価値や持つ力への理解が深まるとともに、ユニバーサル考え方も浸透いたしました。

第３に、まちづくりの加速です。

２０３０年が大会の共通目標となり、選手の育成、強化が図られるとともに、パラスポ

ーツを含め、広く市民の皆様がスポーツに関心を持ち、取り組む契機となりました。

また、民間投資が誘発され、都心を中心としたまちづくりが加速するとともに、都心や競技会場周辺エリアを中心にまちのバリアフリー化が進んだほか、SDGs 未来都市として選定されました。

こうした結果を生かしまして、第2次まちづくり戦略ビジョンに定めた目指すべき都市像の実現に向けた取組を進めてまいります。

(1) の裾野拡大に向けては、子どもたちへのウインタースポーツのきっかけづくりの充実を図るとともに、障がいのある方々の体験機会の創出や、指導者の育成などにも力を入れてまいります。

(2) のアスリートの発掘、育成に向けては、様々な種目の体験会などを開催し、優れた素質を有する子どもたちを発掘することや、オリンピックの指導などによる継続的な選手育成に取り組んでまいります。

(3) のウインタースポーツによるまちの活性化に向けては、国際スポーツ大会の誘致を引き続き進めるとともに、札幌をベースタウンとした広域的なスノーリゾートの推進のほか、子どもたちへのオリンピック・パラリンピック教育についても引き続き取り組んでまいります。

これらの取組をハード面で支えるため、(4) のウインタースポーツ環境の整備として、市所有のスポーツ施設の更新、機能向上を計画的に進めるほか、民間投資の支援などにも取り組んでまいります。

こうした取組を通じて、第2次札幌市まちづくり戦略ビジョンにおけるまちづくりの重要概念であるユニバーサル（共生）、ウェルネス（健康）、スマート（快適・先端）の視点を持ち、世界屈指のウインタースポーツシティの実現を目指してまいりたいと考えております。

説明は以上となります。

○黒田会長 ありがとうございます。

ただいまの事務局からの報告事項について、ご意見やご質問などがありますでしょうか。

今回はオリンピック誘致が断念されたということで、個人的には誘致活動を踏まえた今後の取組というところでもお話をされていましたが、大会運営や関係各所との連携方法などを風化させないように今後も継続できるように、マネジメント能力という部分で残していただけることを切に願います。

委員の皆様、何かありますでしょうか。

○浅香委員 大まかなことは分らないのですが、過去の大会を継承する文化等も含めたレガシーということを招致活動の中で耳にたこができるぐらい言われてきた、また聞いてきたと思います。小さい話ですが、地下鉄のオルゴールのような「虹と雪のバラード」が3月ぐらいで廃止されるということが新聞紙上に載っていました。これまでの72年のレガシーを、今育っている子どもたち、これから産まれてくる子どもたち、招致活動が十数

年間はストップするわけですから、この曲は何だということを継承していくために必要なのではないかと思います。

新聞の中では、何人かの方からまだやっているのかという札幌市への意見があってやめることになったと掲載されていましたが、これからは小さなことの積み重ねによって、若者、子ども、これから産まれてくる子どもたちが新たなオリンピック・パラリンピックを目指す形になっていくと思います。

この相手は交通局ですが、スポーツ局は知らないということにはならないと思います。スポーツ局で何か意見があればお聞かせください。

○事務局（梅田スポーツ局長） 3月中に廃止するということが報道に出てから、やめないでほしいという声が、日々、我々スポーツ局にも入っております。

確かに、流れている曲はまさに1972年のレガシーということで、札幌らしいメロディーで市民の間に非常に定着をしているので、そういうものはオリンピックと関係なく続けたほうがいいのではないかとのお声はたくさんいただいております。

札幌市としては、きっかけとしてオリンピック招致機運醸成活動の一環として始めた以上、昨年12月の段階で招致活動を停止するということを世の中に発信をしているので、一旦、メロディーについても停止をしようという判断をさせていただきました。

オリパラの招致については、ご承知のとおり、ずっと賛否が拮抗した状態でありました。我々としては、オリンピックの招致活動を通じて、札幌の未来のまちづくり、72年のレガシーというものについて皆さんが深く考え、いろいろなところで議論を闘わせてきたということ自体が一つの価値だと思っています。

この駅メロについても賛否があります。両方がある中で非常に難しい決断だったのですが、市長と相談して、ここはそういうことで始まったので停止をしようということで、今回の措置とさせていただきました。

これぐらいしか説明できないのですが、また運動が起こってくれば復活できるような状態にはありますが、一旦、けじめとして今回はこういう形にさせていただこうと思っています。

○黒田会長 ほかにいかがでしょうか。

○尾形委員 初めてなので場違いな意見になるかもしれませんが、資料3に、右上のところに、大会開催がマイルストーンとなりと書いてあります。マイルストーンというふうに考えると、実際、招致のいろいろな準備をされてきた皆さんが、いろいろ節目節目というのを考えて準備されていたということは理解しているのですが、今日、この後議論されるスポーツ推進計画や、私は連携都市ビジョンの会議も出ていましたが、この地域でオリンピックというのが最終目的ではないにしても、ウインタースポーツがもっと振興するということを考えると、そのマイルストーンという考え方だと、私たち医療の中では、赤ちゃんが産まれてから寝返りして、首が座ってから寝返りしてという順だったでしょうか、それから、はって、立って、しゃべってとなっていくと思います。

そういう段階を言うので、この２年でどういう段階まで目指していくのかとか、節目節目ぐらいできちんと国際スポーツ大会を招致していかないと力も落ちていくだろうと思いますので、そういうことは目標として掲げていったほうがいいなと思っていました。

○事務局（工藤調整課長） 資料のまちづくりの加速という部分では、ヒアリングをさせていただいた中でご意見をいただきました。確かに、２０３０年大会という目標が一つあったことで、若い世代の育成とか目標があることに向けての競技力の向上などがあったというご意見をいただきましたが、

今、委員からいただきました意見のとおり、２０３０年大会招致が一旦停止することになりましたが、今後も今までの取組等を絶やさぬように、国際大会の誘致ということには来年以降も取り組んでいきたいと考えております。その中で、今まで培った大会運営能力や、目指していくべきまちの姿や、そこも併せて今後も引き続き取り組んでいければと考えているところです。

以上です。

○黒田会長 ありがとうございます。

ほかになれば、次の議題に行きたいと思います。

３．議 事

○黒田会長 それでは、次に行きたいと思います。

本日の議題で、お手元の次第にありますとおり、事務局からの附議案件として、第２期札幌市スポーツ推進計画２０２４から２０３３の素案についての議題が提示されております。

それではまず、資料４から６について、事務局よりご説明をお願いいたします。

○事務局（深井企画事業課長） 改めまして、企画事業課長の深井でございます。

私から、審議会に付議する案件についてご説明をさせていただきます。

まず、資料４の第２期札幌市スポーツ推進計画（２０２４～２０３３）の策定等についてご覧ください。

初めに、１の第２期札幌市スポーツ推進計画（２０２４～２０３３）の策定スケジュール等についてでございます。

先ほど、説明がございましたこのオリパラ招致の停止によりまして、第２期札幌市スポーツ推進計画の計画内容に変更が生じたことから、当初は２０２３年度、今年度内の策定を予定しておりましたけれども、資料の図のとおり、２０２４年度上半期の策定を想定しております。これに伴いまして、次期計画の計画期間につきましては２０２４年度から２０３３年度とさせていただきたいと考えております。

次に、２の札幌市スポーツ推進計画改定版の取扱いについてでございます。

次期計画が２０２４年度の策定となった場合に、スポーツ推進計画改定版、この計画期間は２０１３年度から２２年度であるため、２３年度が空白期間となってしまいます。そ

のため、この改定版の計画期間を１年間延長させていただきたいと考えております。

延長期間につきましては、現行の目標や成果指標はそのまま継続をすることとして、２０２３年度の成果指標や掲載事業の実績については、新年度に取りまとめた後に当審議会に報告をさせていただきたいと考えております。

資料４の説明については以上です。

続きまして、資料５の第２期札幌市スポーツ推進計画の（素案）及び参考資料としてお配りしているＡ３判縦の変更箇所一覧をご覧ください。

初めに、先ほど工藤から説明を差し上げましたオリンピック・パラリンピック招致の停止に伴いまして素案を修正させていただいた点に絞って説明させていただきます。

更新箇所一覧ですが、上段の表に記載している内容がオリパラ招致停止に伴うものです。

それぞれの修正理由や細かな文言の修正は説明を割愛させていただきますので、更新箇所一覧表にてご確認いただければと思います。

まず、素案全体をとおしての修正点ですが、オリパラの招致、開催を目指すといった文言や、オリパラの招致開催を通じてという文言は全て削除しております。

それでは、資料５の１１ページをご覧ください。

第２章のスポーツ推進計画の策定にあたってのうち、こちらにはオリンピック・パラリンピック冬季競技大会の招致について記載しておりますが、前回の審議会資料では、招致の経緯や意義、スローガンなどを記載しておりましたが、招致停止に伴いまして、停止に至るまでの経緯や今後の札幌市の取組についての記載に変更しました。

続きまして、２６ページをご覧ください。

こちらは、第３章の札幌市のスポーツの現状と課題となりますけれども、目標３のこれまでの取組状況としまして、オリパラ招致活動の総括の概要を追加しております。先ほども説明させていただきましたけれども、招致活動の検証としましては、大会招致への理解が進まなかった理由について、外的要因及び内的要因の両観点から検証をしております。

招致活動の効果といたしましては、国際スポーツ大会の開催とかまちづくりへの市民参画の取組、官民協働のまちづくりの取組などを挙げております。

次に、５３ページをご覧ください。

第６章の目標達成に向けた方針・施策の体系の表ですけれども、一番下の方針９、オリンピック・パラリンピック冬季競技大会の招致・開催を通じたまちづくりの推進を削除しまして、方針８に施策１８のウインタースポーツ拠点を構築しますといった施策を新たに追加しております。

詳細については、８２ページの一番下から８３ページ、８４ページをご覧ください。

方針９の施策のうち、スノーリゾートシティとしてのブランド化やオリパラ教育の推進、総合型ハイパフォーマンススポーツセンター誘致に関する施策につきましては、オリパラ招致に関わらず推進していく必要がありますため、施策１８に移管をして掲載してお

ります。あわせまして、８５ページから８７ページがこれまでの方針９ですが、ここは全て削除としております。

オリンピック・パラリンピック招致停止に伴う修正点につきましては以上となります。

続きまして、少し間が空いてしまいましたけれども、前回、７月の審議会における各委員の皆様のご意見やアクションプランの査定結果、各種照会調査の結果などを踏まえて修正させていただいた点のご説明をさせていただきます。

ページが戻って申し訳ありませんが、４０ページをご覧ください。

第３章、札幌市のスポーツの現状と課題のうち、現行計画の成果指標でありますウィンタースポーツ目的の来札外国人観光客の１月から３月までの状況について記載しておりますが、令和４年度の調査結果が７月のときはまだ出ていなかったのですけれども、これが公表されましたため、数値を更新しております。

令和４年度については１万８，０００人ございまして、目標の９万８，０００人には到達できておりません。

下の図表３１のとおり、コロナ禍前の平成３０年度と比べますと数値が大幅に減少しておりますことから、新型コロナウイルスの影響が大きいと考えられます。

また、図表の上の説明文ですが、課題や傾向としまして、新型コロナウイルスの影響による来札外国人観光客の目的とかニーズの変化が想定されること、多様な目的やニーズに応じたスポーツを切り口とした観光コンテンツの造成、スポーツツーリズムの取組を推進していくことが必要であることを掲げております。

次に、５２ページをご覧ください。

第５章のスポーツ推進計画の方向性のうち、次期計画の成果指標を記載しておりますが、調査中、検討中としておりました④スポーツ目的の来札観光客、道外、海外の現状値と目標値を記載しております。

調査の結果、現状値は１２３万４，０００人ございまして、目標値につきましては、過去の伸び率などから算出して、２００万人と設定しております。

次に、５３ページをご覧ください。

第６章の目標達成に向けた方針・施策１、施策体系の図のうち、方針３、世界で活躍するトップアスリートの輩出の施策６、アスリートの発掘や育成を支援し、競技力の向上に取り組むと、施策７、アスリートと連携したスポーツ機会の提供を充実しますにつきまして、図の右側の関連目標のピンク色のところですが、新たに目標２にもご意見を踏まえて黒丸を追加しております。

次に、５４ページをご覧ください。

同じく、第６章の目標達成に向けた方針・施策のうち、２、目標達成に向けた方針・施策につきまして、前回の審議会資料では、各方針までは説明文を記載しておりましたが、前回の審議会において方向性についてはご了承いただきましたので、５４ページから８４ページまで、それぞれ

の施策、取組につきまして説明文を追記しております。

次に、５７ページをご覧ください。

施策２の（１）具体的な取組について、４項目、５項目に新規事業として、運動習慣等の獲得、推進という新規事業、また、５項目のウェルネス推進事業という新規事業も追加しております。

次に、６０ページをご覧ください。

施策４のうち、次の６１ページですが、（２）の具体的な取組についての５項目、中段ほどにございます情報提供の一元化、こちらは継続事業でございますけれども、こちらを追加させていただいております。

次に、６４ページをご覧ください。

トピック的な事業や市民がイメージしづらい事業をなどについて、コラムの形で追加しております。

６４ページは、スポーツ施設の戦略的活用についてのコラムとなっておりますが、６９ページには、障がい者スポーツセンターのイメージ、７４ページには、プロスポネットＳＡＰＰＯＲＯの取組、７５ページにはアクションスポーツの推進、８１ページにはウインタースポーツ観戦文化の醸成といったコラムを追加しております。

次に、６８ページをご覧ください。

施策９の（１）具体的な取組についてでございますが、３項目にスポーツ施設におけるアスリート枠、障がい者スポーツ枠新設の検討、これは再掲ですが、こちらにも追加しております。

次に、７３ページをご覧ください。

施策１２の（１）の具体的な取組について、２項目に札幌ドーム周辺活用の推進、レベルアップ事業でございます。こちらにも再掲ですが、追加をさせていただいております。

次に、７９ページをご覧ください。

一番上の青い部分ですが、方針８の文言につきまして、前回の審議会では、誰もが身近にという記載をしておりましたけれども、誰もが気軽にという文言に修正しております。

次に、８２ページをごらんください。

施策１８（１）についてですが、次の８３ページに、具体的な取組として、２項目に新規事業としてスノーリゾート推進事業を追加しております。

最後に、９４ページから１３６ページにつきましては資料編を追加しております。

未確定の部分もあります。未確定というのは、新年度に実施予定のパブリックコメント、市民意見、こちらは終わってからでなければ追記できないのですけれども、作成までの経緯や各種調査アンケートの結果、用語解説を掲載しておりますので、お時間のあるときにご確認いただければと思います。

資料５の素案の修正箇所については以上です。

また、お配りしている資料６の概要版になりますけれども、今ご説明を差し上げました

修正を反映しておりますので、ご確認いただければと思います。

委員の皆様には、修正箇所のほか、内容全般についてご意見を賜りたいと存じます。よろしくご審議をお願いいたします。

以上でございます。

○黒田会長 ありがとうございます。

今、説明のあった議題の資料４から６はかなり膨大ですがけれども、委員の皆様からご質問、ご意見などをお聞かせいただければと思います。よろしくお願いいたします。

まず、資料４のスケジュール等に関して何かご質問等がありますでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○黒田会長 それでは、資料５で基本的にお話いただいたのは２点かと思います。

オリンピック・パラリンピック招致停止に係る変更点と、昨年度に行われた第３回スポーツ推進審議会以降の変更点ということで、我々がお話した内容も何点か盛り込んでいただいている状況です。

資料５の変更点等に関してはいかがでしょうか。

○浅香委員 私は障がい者スポーツ協会の者ですから、そこぐらいしか読んでこなかったのですがけれども、６９ページの障がい者スポーツセンターのイメージを拝見して、涙が出るほどうれしかったです。

ただ、よくよく中身を見てくると、６８ページの中段より下の具体的な取組の中で、「障がい者スポーツセンターの設置検討【新規】」と書いていたり、７０ページにも「スポーツ施設におけるバリアフリーマップ導入の検討」と書いてあります。私は、札幌市のまちづくり戦略ビジョンの委員もさせていただいていますが、全体的に「検討」と書いてあるところが何か所かあって、１０年間検討するのですかという意見を言わせていただいたのです。それはほかの委員からも賛同を得たのですがけれども、何かいい言葉がないでしょうか。

２０３３年までは建たないと思ったから、大分がっかりしてしまったものですから、設置の推進とか、うまい言葉遣いをお願いしたいのです。

○黒田会長 まず、どういう状況かというところですね。

○事務局（深井企画事業課長） 障がい者スポーツセンターの設置に向けた札幌市の現状ですがけれども、昨年の選挙後の市長公約に、障がい者スポーツセンターの設置に向けた検討に着手という公約を受け、今年度に補正予算を組んで、今年は札幌市で新設する場合や、既存の体育施設を使った場合にどのぐらいのランニングコストがかかるか、また、これまでアンケート調査などをしていましたけれども、障がい者スポーツ普及促進協議会、これは浅香委員もご存じと思いますが、この中で、若年層のニーズの把握が昨年度はちょっと足りていないということがあって、今年はまずそういった調査を進めてきています。

そして、新年度、令和６年度予算につきましては、そういった調査報告とこれまでの検討経過も全て含めて、基本構想策定に向けた予算を、今、予算議会が３月いっぱいまであ

りますけれども、この議会の中でこれから審議される予定で、可決された後には、新年度、我々は基本構想策定に向けて作業を進めていきます。この中で、今後の札幌市にとって障がい者スポーツセンターがどういう形であるべきか、こういったものを示していきたいと考えております。もちろん、これは行政だけではなくて、関係する皆さんのご意見も引き続き聞きながら取りまとめをしていきたいと考えているところでございます。

「検討」という言葉は、最初に申し上げた検討に着手というものを受けて使っているのですけれども、進めている内容につきましては、今申し上げたとおり、新年度の基本構想策定に結びつけたいと考えているところです。

○黒田会長 浅香委員、どうでしょうか。

○浅香委員 私は役所言葉がよく分からないものですから、何とか実現できるような言葉があれば、文言があれば、そのように修正していただければありがたいと思います。よろしくお願いします。

○黒田会長 この推進計画の策定自体を1年間延ばしていますね。改定版の計画期間を1年間延長するということは、まだ修正はできるという理解でいいですね。

○事務局（深井企画事業課長） はい。

○黒田会長 何かいい言葉があればというところだと思うのですけれども、基本的には議会に通るか通らないかというところでせめぎ合いという状況でしょうか、それとも、ずっと行く感じでしょうか。

○事務局（深井企画事業課長） あくまでも議会の審議の中で来年度予算に対する賛成、反対という中で賛成多数で可決されるわけですから、この場でどうなるかということは申し上げにくいのですけれども、例年で申し上げますと、否決された例は過去にはないです。

○浅香委員 参考までにお伝えしますと、大阪市かは二つ目の大規模な障がい者スポーツセンターを既に運用されていますし、名古屋市も2028年に障がい者スポーツセンターの二つ目がオープンするということで、設計もほぼ終わって、いざ建てようかという段階に入っているとこの間の政令指定都市会議で発表していました。

ですから、札幌市も何とかお願いしたいと思って発言させていただきました。

○黒田会長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○高橋委員 61ページに札幌市のスポーツ施設の提供情報の一元化とあると思うのですが、私の勤務している職場で札幌市の体育館を予約したいということがよくあるのですけれども、基本的に全く取れないというのと予約の状況が見られないというところがあって、いつ空いているのかという情報がなくて困っています。

例えば、HARP¹で一元化して誰でも見て分かるように改善していただけると、使う側としてはとても使いやすいと思います。施設によっては電話予約しかできないということ

¹ 北海道電子自治体プラットフォーム

があったり、何月何日に1年分の予約を取れるから、その日に電話をかけてねというところがあるのですけれども、電話をかけてもつながらないという状況があるので、札幌市の施設を使いたくても使えない人がたくさんいるというのが現状かと思います。そこは、使いやすさを見直していただきたいというか、ここを早めに改善してもらえたら、使う者としてはうれしいと思います。

○事務局（深井企画事業課長） おかげさまで、施設の稼働率も高い一方、今のご意見のようになかなか取れないという現状があることも我々は認識しております。

どういうシステムがいいかは今後の検討になろうかと思いますが、今いただいたご意見を踏まえて、今後、検討を進めていきたいと思っています。ありがとうございます。

○黒田会長 ほかにいかがでしょうか。

○和泉委員 札幌市中体連の和泉です。

2点あります。

1点目は、ウインタースポーツ観戦文化の醸成の80ページのところとスポーツツーリズムの関連性をもう少し高めてもいいのかなと思います。スポーツをしに来る外国の方々以外に大会を見に来る外国の方々を増やしていくというのも一つ手なのかなと思い、その関連性が増えたらいいなと思っています。

2点目は、私は子どもたちに関わっているので、先ほどのオリンピックのときに言おうかどうか考えていたのですけれども、オリパラ教育が行われているのです。オリンピックを呼んだ学びの場では、子どもたちは目をきらきら輝かせて、でも、東京オリンピックの事案はもう論外だし、担当された方々の無念さも感じている上で、大人たちは何をやっているのかというのが子どもが本当に思っているところだと思うのです。

オリンピックが来て、みんな楽しみに待っていたよう、学んだことをやってということをしていたのに、大人たちの都合でオリンピックがなくなりました。

オリパラ教育が継続されると書いてあるのだけれども、そこがウインタースポーツにぱっと切り替わっていて、僕としては、子どもたちはどう思うかなと思っています。

皆さんお分かりだと思うのですが、これから65歳以上の人がどんどん増えていて、あんまり記録されると困るような乱暴な言葉になってしまうかもしれないのですけれども、我々、大人のみんなが、社会全体が子どもたちのお世話になるときに、現在、子どもたちは何も言えない状況にあって、その子どもたちのために大人たちがちゃんとやらなければならないのだというような表現があってもいいと思いました。

これは10年間の計画なので仕方ないのですけれども、即時的なところに目が行き過ぎているので、子どもたち世代を巻き込んだという言葉がありましたけれども、そうではなくて、大人たちが未来の大人のためにちゃんとやらなければならないという書きぶりもあるのではないかと思います。

○黒田会長 いかがでしょうか。

○事務局（深井企画事業課長） 今、一つ目の観戦文化の醸成とインバウンドというか海

外のツアーについてですが、先月の男子ジャンプのワールドカップに私も見に行ったのですが、日本人の観客もすごい多く、海外からの観客も来ておりました。どういう経緯でそこに来ているのか、自力で来ているかどうかは把握していないのですけれども、そういったところも経済観光局の部局と連携しながら、進められるところがあれば検討していきたいと思います。

○事務局（工藤調整課長） オリパラ教育についてです。

こちらに書いておりますとおり、引き続きこれは続けていきたい取組だと考えております。

オリンピック・パラリンピックは、2030年招致とはもちろん密接な関係を持ちながらオリパラ教育を続けておりましたけれども、72年オリンピックを行った札幌というところもありますので、そういうところも教育でしっかりと伝えていきたいと考えております。平成28年から始めておりますので、和泉委員がおっしゃるとおり、これまでオリパラ教育を受けていただいた子どもたちに関しては、オリンピック・パラリンピックをかなり楽しみにされていた部分もあろうかと思います。もちろん、ウインタースポーツシティーというほうに切り替えるというか、そういうことを続けながらウインタースポーツシティーとしてしっかりと札幌が実現に向けて取り組んでいく中で、将来的にそれがオリンピック・パラリンピックの招致につながっていくようなことができればいいかなと考えております。

すみません。回答になっているか分かりませんがよろしくお願いいたします。

○黒田会長 和泉委員、よろしいですか。

○和泉委員 こういう計画をつくっていくときにはすごく分かりますし、中身もすごく妥当性のあることだと思うのですが、子どもたちはちょっと冷めてしまっています。大人へのサイレント不信感といいますか、無力感というか、でも、あなたたちの高齢人口はこれから4倍になっていきますね、私たちは4分の1になりますねと。

この間、子どもたちが地域学習をして、これから数十年の中に豊平区1個分の人口が少なくなりますという話を、子どもたちが自分たちで調べて学びをしているのに対する大人側からの回答がないと思っているところです。

この場に適さない話になってしまいましたが、子どもたちの未来に対してそういうメッセージを出すことも必要だと思っております。

○事務局（金谷スポーツ部長） 和泉委員おっしゃっていただいたことは、スポーツに限らず、行政の仕事全般が将来の子どもたちのためにというのか、将来の大人に向けての仕事だと思っています。

特に、スポーツの関係については、まさに我々がやっているものは、子どもたちを健やかに育てていく、将来の健康のためにもスポーツを推進しているというところがあるのです。

今回、オリンピックの関係では子どもたちに残念な思いをさせた部分は確かにありまし

たが、我々としては、スポーツの楽しさを子どもには継続して伝えていきたいというふうに思っていますので、和泉委員が言われたことは我々に対する叱咤激励と考えて、今後も子どもたちが夢を描いていけるようなスポーツ行政を進めていければと思っています。

○黒田会長 ほかにいかがでしょうか。

○成田委員 今のオリパラ教育の議論を聞いていて、私自身も、オリパラ教育の講師として、あとはアスリート先生だったりとか、札幌市内の小・中学校に結構たくさん行かせていただいている中で、和泉委員がおっしゃったように実際に子どもたちと接すると、本当に目を輝かせて一生懸命取り組んでくれたり、憧れを持って取り組んでくれたり、本当にすばらしい事業だなと身を持って感じています。

そして、今回の新しい計画の中にそれが継続されると書かれていたのは、私としてはすごくうれしいと思いましたし、道内のほかの市町村にも行かせていただくことが多いのですけれども、これだけ取り組んでいる市町村はほかにないですね。まちの規模が大きいということを除いたとしても、オリパラ教育であったり、アスリートを使っているいろいろなことをやったりというところは、札幌市はもっと自信を持ってというか、もっとPRしてもいいところかと思います。

ほかのこういう施策に関しても、私は札幌市民ではありませんけれども、外から札幌市を見たときにすごくうらやましい部分はたくさんあって、ほかのまちにできないいろいろなこと、札幌だからできることはすごくあるなと感じているので、オリンピックがなくなります、オリパラがなくなりますということで声が小さくなっていくのは非常にもったいないと思っています。

いろいろな見方があると思うのです。外からの見え方と、住んでいらっしゃる方々が感じることは、必ずしも目標が同じにはならないかもしれませんが、スポーツを通して子どもたちの未来に何かいいことがあるというメッセージは、もっと声を大きくして言ってもいいと感じました。

○黒田会長 子どものスポーツ実施率は将来的なスポーツ実施率に関わってきますので、小さい頃からスポーツにまつわる習慣をつけるということには私も賛同いたします。

いろいろ盛り上がってきているのですけれども、ひとまず議題に戻りまして、変更点に関してご意見等はないですか。

○明石副会長 事前にいただきました資料をじっくり見まして、前回もすごくいい新規の事業や計画がございましたけれども、資料6の3枚目のスポーツの力でまちの未来を切り開くというところは、いろいろな面ですごく活性化していくのではないかと私は思いました。この理念、目標から言うと、今、人々は少子化とか高齢化とか、人口減少の状況でも、子どものときから学校でスポーツをしたり、見たり、いろいろな形で参加して大きくなっていくと思うのです。その内容は、最初に使っていたスポーツを続ける方もいますけれども、途中で替わって、スポーツをして、スポーツを見て、スポーツを支える人材になってくれたりしているのです。

そういうところから健康寿命が延びて、地域も活性化してきているのではないかと思います。今、老人クラブとか老人福祉スポーツセンターなどが今はすごく盛んなのです。その部分が健康寿命とか地域活性化ということで、いろいろなことが書かれている内容の新規の事業やレベルアップの事業、また、ここにはないですけども、送っていただいたアイスリンクの計画などは本当に叶えてほしいのです。

国内外から観光に来ていただいています、体験型をすごく希望しているようです。テレビのインタビューを受けている外国人も、体験型の観光をしたいと言っているのです。

そうすると、スケートリンクの資料をもらいましたのを見ると、カーリング場所も増やす、いろいろなところも増やしてくれる、そんなところから見ると、国際的にいろいろなところがニセコのように、札幌市でもスポーツの体験がいろいろ思ってもらえると感じていました。

資料6は分かりやすいです。方針が1から8、施策が1から18ありますが、この内容が一つでも多くできると、札幌市のスポーツの期待感がすごく増えると考えております。

よろしくお願いいたします。

○黒田会長 まさにそのとおりですね。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

今、明石副会長からもお話をさせていただきましたが、資料6に関しても、ぜひ何かご意見等があれば、変更した内容ですね。それを反映したものになりますので、この部分でもありましたらよろしくお願いします。

○尾形委員 資料6についてということではないのですが、今、ウインタースポーツのところで議論されていましたが、例えば、オリンピック招致に向けていろいろな競技会場を見直すときにいろいろな時期に必ず環境問題と言われていたような気がするのですが、具体的にどういうことがあってというのは、僕はそこまで見ていなかったのですが、環境問題が出てきていると思いますし、今後、オリンピックをまた目指すとしても、そうではなくても、国際スポーツ大会とか普通にやっていくスポーツを振興していくためにも、環境問題は避けて通れないと思うのですけれども、必ずしも相対するというか、スポーツを振興すると環境が破壊されるというわけでもないで、その環境をきちんと生かした形で、例えば、子どものお話がありましたけれども、子どもたちが環境問題を理解する上でも、スポーツで冬に外に出ることが大事ではないかと思っています。

私たちがふだんやっている医療とは離れていますけれども、WHOでは、今、プラネタリーヘルスという言葉が最近すごく使っているのです。現実には起きているのが、いろいろなところで戦争があったり、飢餓があったり、いろいろな病気が蔓延していたりということがありますが、もともとの気候変動に対しても、健康ということでは大事なのだという考え方が出てきています。プラネタリーというのは、日本語で言うと、地球の健康と訳したほうが惑星と訳すよりも地球と訳したほうがいいと思うのですが、そういう考え方で環境問題とスポーツと一緒に考えられるような取組、あるいは、それがツーリズムにもつ

ながると思うのですけれども、特に日本の中の北海道はそういう部分のいい面がまだありますし、取り組まなければならない点も、例えば、オリパラのときに雪害の話が一時的に出たこともあります。雪が多くて困っているから何とかしろという話ではなくて、その雪をスポーツに生かしていかなければならないです。夏は夏で、北海道マラソンもあの時期に開催して本当に安全なのかというレベルまで来ていますから、そういうこともちゃんと意識して、スポーツと環境問題ということを、ここ一、二年であれば、どうするかということでもいいと思うのですけれども、10年後まで考えていくのであれば、そこが入っていたほうがいいのではないかと思います。

どんなふうを書くか、難しいと思うのですけれども、スポーツを通じて、環境を意識したり環境を守るということです。ちょっと前にもアスリートの皆さんが環境問題のことにいろいろ取り組まれているのをニュースでも見たことがありますけれども、例えば、学校などに関わったり、いろいろな企業も関わりをするということが大事ではないかと思っています。

○黒田会長 ありがとうございます。

確かに、環境は入っていないですね。

○事務局（金谷スポーツ部長） 環境問題というか、まさに我々がウインタースポーツを推進していこうとしているのは、札幌は年間5メートル近くの雪が降るという地域特性を生かして、札幌に住んでいる子どもたちにウインタースポーツをやっていただきたいということで推進していますので、今回の書き物の中にどこまで環境ということを意識して書いているかということをもと考えると、そこまで配慮はしていなかったという気はしているのですが、思いとしては、地球温暖化になったとしても、札幌は、今後もほかの地域より間違いなく雪が降る地域ですので、そういう特性を生かして子どもたちにウインタースポーツに親しんでいただきたいという思いで書いているつもりです。

○尾形委員 そこがちゃんとできていくことで、もう一度、オリンピックを札幌でやってほしいという外からのニーズというか要望にもつながるような気もするので、そういう意味でも、環境を意識してスポーツを振興していくことが大事ではないかと思います。そうすると、オリンピックはやるけれども、環境が悪くなるという議論にはならなくなるのではないかと思います。

○事務局（梅田スポーツ局長） スポーツ局長です。

貴重なご意見をありがとうございます。

今、オリパラに関して言っても、昔のオリンピックは、特に冬の競技、スキー競技は、木を切って、スキー場をつくってということがずっと繰り返されてきて、まさに東京オリンピックを招致するイコール自然破壊というのがいろいろなところで問題になっていました。IOC側もその辺の考え方がずっと変わってきて、持続可能なオリンピックのモデルをこれからつくっていこう、できるだけ開発をしない、既存の施設を利用したオリンピックにしていこうというほうにかじを切っていますし、クライメートポジティブの大会とい

うことでCO₂の排出量をマイナスにしていく、そんな大会ということを掲げています。

その中で、オリンピック自体、IOC側も考え方が変わってきていると思いますし、札幌は、今、部長が申し上げたように、我々がIOCといろいろな対応をしていく中でも、IOCが目指している持続可能なオリンピック開催可能なかなり有力なまちの一つと何度も言われてきているので、我々は札幌市民に対してこれだけ特別なまちなのだということをもう少し伝えなければいけないと思っています。世界からそういうものが求められているということをもっと伝えていかなければいけないと思っています。

確かに、今、SDGsとか環境がキーワードになっているので、こういった行政計画の中でもそういった視点を入れられないか、検討させていただきたいと思います。

○黒田会長 ありがとうございます。よろしくお願いします。

ほかにいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○黒田会長 ありがとうございます。

それでは、次に移ります。

続きまして、資料7について、事務局よりよろしくお願いします。

○事務局（深井企画事業課長） 資料7、札幌市スポーツ推進計画掲載事業の令和4年度の実施状況をご覧ください。

こちらの資料は、現行計画の掲載事業の実施状況でございます。

現行計画では、複数の場所に再掲されているものを除きまして85の事業を記載しておりますが、これらの実施状況をまとめたものになります。

資料上段の自己評価集計をご覧ください。

2022年度、この年も新型コロナの影響はありましたけれども、感染対策を徹底し実施手法とか開催時期の変更等の工夫、対応を行うことで、実施結果に記載のとおり、自己評価が二重丸の当初の予定どおり事業を実施できたものと、丸のおおむね当初の予定どおり事業を実施できたものが全体の8割以上、83.5%、71事業となっているところです。

また、三角の予定どおり事業を実施できず今後に向けて検討を要するもの、また、当該年度時点で事業化に至っていないものは6事業、バーの外的要因により未実施のもの、または規模を大幅に縮小したものは大幅に減少し、8事業となっております。

個々の事業の詳しい実施内容につきましては、お時間のあるときにご確認いただければと思います。

資料7の説明については以上です。

それでは、今説明のありました資料7に関して、委員の皆様、ご質問、ご意見等がありましたらお聞かせいただければと思います。よろしくお願いいたします。

まず、私からよろしいでしょうか。

自己評価で8割以上というのはかなり高い数字だなと思うのですがけれども、手応えはあ

ったという感じでよろしいでしょうか。

○事務局（深井企画事業課長） はい。

○黒田会長 おおむね達成はできているということですね。

○事務局（深井企画事業課長） この間、特に令和2年度、3年度は、完全にコロナの影響で緊急事態宣言などが常に出されているような状況でした。その年は何もできない状況で、部活についても大会に出る場合はいいとか、かなり制約がある中でしたけれども、今年度は、5類になったということもあって、日常に戻り切ったとは言わないまでも、大分戻ってきている状況で、新年度以降というか、次期推進計画の新たな目標についても進めていければと考えています。

○黒田会長 ありがとうございます。

堀田委員、いかがでしょうか。

○堀田委員 仕事柄、小さい連盟さんや野球のチームなどと関わることが大変多いのですが、8割以上、目標を立てたところの数値に近づけることができる、コロナが本当に5類になったという実感とともに、小さい連盟さんは小学生とか中学生の人数が少なく過疎化していく中で確保ができないのです。ですから、隣まちとか近隣と協力しながらチームを増やす努力をしています。ただ、先生方や担当する監督の声を聞きますと、そういう情報網が少ないので、それが実現しなくてチームが分解するという悪い連鎖も裏のほうで多少見えた気がします。

やはり、札幌市から出される便利なツールや情報がとても重要かと思いますし、それが今後の少子化していく時代においてはかけがえのないツールになると感じました。

○黒田会長 関わっていったというのは、野球以外にもあるのですか。

○堀田委員 例えば、スケートの人数は個々にできますけれども、大会に出るための出資金とか募る応援金が足りないとなってきました、スポーツが盛んなときの子ども時代の私の知っているところの形態とはちょっと違うなと思いますし、これが進むとどんなふうになるのか、問題視しなければいけないと感じています。

○黒田会長 それを踏まえた上で札幌市にお願いや提言はありますか。

○堀田委員 個々が集まって、違うチームと対戦すれば練習試合になるというときには、先ほど成田委員がおっしゃったように、いつでも連絡が取れない、電話をかけても出ない、ウェブやSNSを使ったやり方でも不十分の場合があるならば、それを改善することで、知らない人と卓球ができたり、体操も私の子どもが行っているところは1人しかいませんので、誰と練習するとか教えてもらうにもすべをどこかに求めるわけで、もう少しニーズに合った簡単なログインの仕方といいますか、私はアナログなのでネット上での予約などが苦手なのですが、そういうことが得意な若者たちにとっては、それがスムーズでなければ意味をなさないのかなと感じました。

例えば、土・日のクラブとか趣味でやるテニスとか、そういうことにも全てスムーズにいったほうが活性化すると思いますし、短い夏の利用価値はそこにあるのかなと感じてお

ります。

○黒田会長 ほかにいかがでしょうか。

○杉本委員 資料7で、コロナ禍のひどい中での実施で8割を超えたということで、大変ご苦労だったのではないかと考えております。

私は、スポーツ協会ということで、ここに書かれている事業全部ではないですけども、幾つか共催でやったり協力させていただいています。

話が戻るかもしれませんが、オリンピックは残念な結果で、機運も上がってこなかったということもありますが、今度は逆手に取って、札幌市として冬季スポーツの普及プラスオリンピックも含めて本気度を見せるために、今回の冬季の体験会だけではなく、ずっと長く続けて本気度を見せることによっても、機運の上昇であったり、それによって子どもたちがトップ選手になったりということにもつながってくると思いますので、引き続きよろしくお願いしたいと考えております。

○黒田会長 ほかにいかがでしょうか。

○岩崎委員 僕はプロスポーツクラブの立場で出席させていただいていますが、今日は皆さんから非常にいい話を聞いたなと思いました。

和泉委員をはじめ、子どもたちを大事にすること、子どもたちに夢を見させること、我々プロスポーツクラブとして、子どもたちにいかに夢を持ってもらうか、感動してもらえるか、元気を与えられるかをテーマにやっているの、いろいろな小学校を回ったり、成田委員と同じような活動させてもらったりしています。

先週、滝上町に行ってきました。二つの小学校に行ってきて、全校生徒70人ぐらいと11人のめちゃくちゃ小さい小学校だったのですが、そこに選手やOB連れて行って、子どもたちとサッカーボールで触れ合う機会をつくりました。

ただ、滝上町からだ札幌ドームまで見に来る機会がなかなか少ないので、我々がいろいろなところに出て行って、子どもたちと触れ合って、スポーツに関心を持ってもらうことのきっかけづくりが大事だと思いました。

また、尾形委員からもお話があった環境の問題ですね。今、Jリーグも環境省と取組を初めまして、我々も札幌ドームで興行をしながらCO₂の排出量を削減したり脱炭素に取り組んだりとか、様々な環境活動を実際に興行としてやっています。

それがスポーツの中では当たり前の文化になってきています。僕も、尾形委員から話があるまで、この推進計画の中で環境に関してあまり考えていませんでした。でも、皆さんからもお話があったとおり、札幌市の中でもそういった環境のことをベースにしながらまちづくりとして、その中のスポーツ推進計画の一つと皆さんも捉えてもらって、取り組んでいきたいと思いました。

せっくなので質問を一つさせてください。

取り組めなかったという中で、14ページのハイパフォーマンススポーツセンターです。ここは非常に興味があるのですが、今、ちょうどコンサドーレはキャンプに行っていて、

この金曜日に帰ってきて、3月10日にホームでやるのですけれども、けが人だらけなのです。けが人だらけでスタメンを決めるのが難しいところなのですが、スポーツとけがというのはどうしても切り離されないところです。

今、スポーツもデータが見える化しているのです。我々も、選手一人一人の走行距離とか、トップスピードで、何回、市街地を走っているとか、そういったデータを基に様々なトレーニングメニューとか、けがをしない体づくり、リハビリなど、そのデータが見える化して活用しているところです。

そして、今後、スポーツ界ももっとデジタル化していくと思います。今、サイエンスがスポーツに加わっているので、本当、医療に興味を持って仕事に就きたい子とか、スポーツと医療に絡んで仕事をしたい子とか、そういった子が北海道でもどんどん増えてくると思います。東京にはこういった施設があるのです。僕らのも、先週、こっちではそういうリハビリがなかなかできないから東京に行くのです。なので、北海道にもそういった施設があると、トップレベルのスポーツの話にはなってしまうのですが、スポーツの価値も上がるし、スポーツに取り組まなくても、そこで働きたいとか、興味を持ってくれる子どもたちが増えるのではないかと思います。

今回は三角ということなので、今後に期待したいと思っています。

○事務局（工藤調整課長） ハイパフォーマンスセンターの誘致に関してですが、札幌市の重点目標としては、引き続き誘致に要望していきたいと考えています。

冬季型のハイパフォーマンスセンターと書いておりますけれども、オリンピック・パラリンピックがなくなっても、札幌でハイパフォーマンスセンターを誘致できないか、どういう形で誘致するのがいいのか、どういうやり方がいいのかというところをいろいろ検討していきたいと考えております。

あわせまして、医科学サポート体制の在り方ということで、ハード、施設の誘致となると時間もかかりますので、そういうソフト面でどういうことができるかというところも併せて検討していきたいと考えております。

○黒田会長 個人的には、スポーツ科学の世界にいますので、この部分に関しては非常に期待をしています。先ほど岩崎委員もおっしゃられましたが、スポーツを取り巻く環境を多くして、単純に言えば、そこの職を増やすということですね。それを地産地消できれば、スポーツに興味がある人が増えていくと思いますし、先ほど泉委員もおっしゃいましたが、子どもたちが将来スポーツに関わるような職業に就くと。こういうふうにしていけばその施設で働けるとか、そういった目標も出てくると思います。

直接、スポーツをするという部分もありますが、今、Jスポも、アスリートセンタードと言って、アスリートを取り巻くアントラージュも幸せになろうよという提言をしていますので、保護者、サポーター、医科学でサポートするトレーナーといったような充実した施設ができれば、スポーツの価値も上がってきて、おのずとスポーツの実施率も上がってくるのかなと思っています。

ほかにかがでしようか。

（「なし」と発言する者あり）

○黒田会長 それでは、議題としては以上で終了ですけれども、全体を通して質問等がありますか。

（「なし」と発言する者あり）

○黒田会長 事務局から審議事項等がありますか。

○事務局（深井企画事業課長） ありません。

○黒田会長 それでは、進行を事務局にお返しします。

４．閉 会

以 上